
黄昏に生きた小さな願い

神衣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄昏に生きた小さな願い

【NZコード】

N3768P

【作者名】

神衣

【あらすじ】

私は魔法使いが嫌い…特に正義を語る魔法使いが
私をモノ扱いする人間が嫌い

絶望の中で生きてきたそれを救ってくれたヒトたちもまた私をモノ
扱いする

そんな時、彼は来てくれた

そのヒトが私を救ってくれたのだから

これはFate/stay nightと魔法先生ネギま！のクロス

オーバー作品です。

処女作のため、文章構成等問題があるかもしれません、優しい眼で見てくれるにありがたいです。

原作ブレイク行います。今まで見てきた一次創作にはないような話を作つてみたいと考え、原作等の時間軸等をかなり原作とは違う形になると思います。原作好きの人は余り受けが良くないかもしれません…

アンチネギというかアンチ正義の魔法使いものの予定
よろしくお願ひします

第1話 召喚・守護者からの脱出（前書き）

まずはいいですね

アスナの心境が原作と違つのがある意味良い感じ
今後もっと変えていく予定

あ、ちなみに処女作です
ヒミヤは英靈になつて、士郎を殺すことを考える前だと思つてください

第1話 召喚・守護者からの脱出

I am the bone of my sword.
Steel is my body, and fire is
my blood.

I have created over a thousand
blades.

Unknown to Death, Nor known to
Life.

Have with stood pain to create
many weapons.

Yet those hands will never hold
anything.

So as I pray "Unlimited Blade
Works".

無限に剣を内包したい心象世界を有する、かの鍊鉄の英雄、英靈工
ミヤ

世界の守護者となり、様々な時に世界から召喚され、世界の絶望を
前に人を殺して、殺して、殺しつくした

そして無事世界の命令を終え、また英靈の座へ戻るべく世界から消
失した

side ハミヤ

「.....」

今回も多くのヒトを殺した

世界の絶望を回避するために事件が起きる前に召喚されるのではなく、今回も事件後、事件の原因を排除するべく召喚されたのだ
彼はこの世界の輪から抜け出したかった

「こんな」とをするために守護者になつたのではないのに……

そして英靈の座へ戻るその最中……

グウウウウ！

！？

どこかへと引き付けられて行く

「う…これは…召喚…!?」

自身は召喚に抗うすべはない
だが、英靈エミヤは思つた
座から抜け出す可能性を……

side out

side ???

???

「な……なに? なんなの? これ……タカミチ、何するの?」

私はアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア
ナギたちに助けてもらつた黄昏の姫御子と呼ばれていたヒト

私を大戦から助けてもらい、あの空間から出してくれたナギたちには、素直に感謝している

しかし、私は魔法使いが嫌い……特に正義を語る魔法使いが
どうやら私の魔力は特別らしく、魔法を全て打ち消すことが出来る
らしい

その魔力が危険だから

その体質が危険だから

……でも……だからといって監禁し続けるのは正直私は我慢がならなかつた

確かに危険なモノは封じて置くのが一番安心出来る手段

でも私はモノじゃない! ちゃんと意識を持ち、人格をもつたヒトなのに! ! ?

ナギたちも魔法使い……さらにいえば私が特に嫌いな正義を語る魔法

使い

感謝こそすれ、自分が最も嫌いとするヒトたち

彼らだけは嫌いにならないようにしよう……そう思っていた

「……『ゴメン、アスナちゃん……君のためを思つて……君のつらい記憶を忘れるために……記憶を消させてもらひうね』

なのに、ついに彼らさえ私をモノ扱いするの！？
今までの人生は確かに幸福ではなかつた
でもこれでも今までの生きてきたのに…
この記憶だけが私自身が唯一持つてるモノに！…
それさえなかつたことにするの！？

「！？い…嫌だ！！記憶を失うなんて嫌だよお！！！」

彼は動じないとしなし

何故? な世? ガセ? ガセ? ガセ? ? ? ?

自身を拘束した周りに書いてある魔法陣が徐々に光り出す
やめてほしい！！！助けてほしい！！！だれか……誰かあああ
あああああ！！！

ふと急激に魔力が減った

これが記憶を封印される兆候なのか……

もうだめだ、そう思つた

自身がとんでもないヒトを召喚しているとは知りずこ

しかしそのヒトが自分の運命を変えるのは思いもしなかつた

第2話 救出・現状把握

side タカミチ

「……ゴメン」

アスナちゃんを拘束し、記憶消失の魔法が発動する
……正直いうときつい…彼女の叫びが自分の心を苦しめる
…彼女の問いに答えなければよかつたと若干後悔する
そうすれば彼女の叫び声を聞くこともなかつたのに…
でもこれが彼女のためなのだ
これからつらい記憶を忘れて平穏な日々を送るために…

フォンツ

!?

音と共に出てくるのは小さな召喚陣
記憶消失の魔法陣の左横

予想だにしなかつたことに驚くも危険を感じ、戦闘体勢をとる

召喚陣より出てくるのは男性

僕よりも身長が高く年も上

白髪で、褐色系の肌をしており、ボディアーマーを付け、赤い外套を羽織っている

こんなところに唐突に現れた男

周りの魔法使いも自分と同様に危険を感じたのか、武器や杖を構え、戦闘体勢をとっている

召喚された男は、周りを確認し、無言

改めて魔法陣を確認するや、召喚陣へ向き直り、ふと男がつぶやいた

「……投影・開始↗トレース・オン↖」

つぶやくと男の手に小さな剣が握られていた

殺傷能力の低そうな雷のような変わった形状をした小さな剣だが、その剣にはかなりの魔力が込められている何かしらのアーティファクトだろうか

そして男は握られた剣を振り下ろす

振り下ろすは彼女ではなく、魔法陣

「何をするつ！？」

相手の行動に対し、とつさに叫ぶ
が男が止まることはなく

「破戒する全ての符つ！→ルールブレイカー←」

魔法陣へその剣を突き立てた

すると、先程まで光っていた魔法陣の光りが急に弱まり、そして魔
法陣 자체が消えた

side out

side Hミヤ

召喚されたのは、広く開けた森の一画

周りを軽く一瞥するが、自身横に拘束された少女が一名前方に様々な年齢の男女数名向られるのは敵意ではなく、警戒心のようなものだが、すぐにこちらに向かってくることはないようだ

ならば、まずは自身の状況を確認するとしよう

——同調・開始>トレース・オン<

身体機能・・・正常 現在身体年齢 20代後半 受肉しており、人間の1／5倍の速度で成長
聖剣の鞘・・・正常稼働確認
魔術回路・・・27本正常稼動確認
魔力・・・英靈として前回の世界にいたときの最大量とほぼ同等
強化・・・可能
解析・・・可能
投影・・・可能
宝具投影・・・可能
無限の剣製・・・発動可能
世界へのアクセス・・・不可
バス・・・世界とのバスはなく、自身横の少女を主と認識としたパスが存在

異常な点をいえば受肉していることがまず挙げられる
英靈は死後、世界を守護するために座に存在するもの
また靈体として存在することが普通であり、肉体を持つてしまつて
いることが異常

1／5倍での成長としては普通の人間ではないのが影響していると
思われる

次に、世界へのアクセス不可兼世界とのパス損失
また少女へのパスが存在する時点で自身を呼んだ存在が彼女だとうのが妥当だろう

つまり、彼女は異常なのだ

世界から私を切り離し、英靈という枠組みからさえ離した
さらに彼女から流れてくる魔力はやけに濃い
質も若干違うのだが、この質の違いが可能にしたのだうと予想を
立てる

受肉に関しても彼女が関わっている可能性が高い

なんと思おうが、彼女が自信の主であり、また世界から救つてくれたのだ

感謝こそすれ、疑うのは間違いか…

主の状況を見るからに拘束され、何かしらの魔術をかけられようとしていると見るのが妥当

ならば

「……投影・開始↗トレース・オン↙」

ある宝具を投影する

第5次聖杯戦争にキャスターのクラスで呼ばれた、ギリシャ神話に登場する裏切りの魔女メディアが使用した裏切りの剣

あらゆる魔術による生成物を初期化する短剣である対魔術宝具

「何をするつ！？」

静止の言葉が聞こえたが、止まることはない

「破戒する全ての符つ！↗ルールブレイカー↙」

眼の前の魔方陣が消失したのを確認し、彼女の元へと向かう、彼女の拘束を解きにかかる

ふと気づいたが、彼女はこちらを見ていた
どうやら意識はあるようだな

「…あなたは、誰？」

と彼女は聞いてくる
まあ、当然の反応か
見ず知らずの急に現れた男が魔方陣を消して、自分を助けようとしているのだ
助けてくれたからといって味方と分かつたわけではないのだから

「…ふむ、その質問に答えたいといろなのだが、先にこちらの質問に答えてもらつても構わんかね？」

と質問する
それに対し、

「…なに?..」

と、どうやらこいつらの質問を聞いてはくれるらしい

ならば聞こいつ

「…問おひ、君が私のマスターか?」

s
i
d
e

o
u
t

第2話 救出・現状把握（後書き）

とうあえず2話更新しました。

私自身、ストックを作っているのではなく、電車の中や自宅の暇な時間を使って、PCや携帯の中に、構想を文章にしながら作っています。

方針や大まかな部分は決まっているのですが、文才がないので、速度はかなり遅いかもしれません

感想お待ちしております。

次回

「第3話 叫び・少女の想い」

ご期待ください

第3話 叫び・彼女の想い（前書き）

1日に2話も投稿するとは思いもしませんでした！
作者の神衣です（・・）！！

この勢いで引き続き、次話も考えていくつと思っています
誰か俺に文才を分けてくれ…

一応多分シリーズ（？）回

第3話 叫び：彼女の想い

s i d e アスナ

眼の前の男は今何と言つた

「…………いつ……い今何て言つたの？」

「君が私のマスターか？と聞いたのだが……。君が私を呼んだのだろう？」

私はこの男性を知らない
なのに彼は私が彼を呼んだと言つてきてている

呼んだ？いつ？

！？

ひょっとしたら、私の救援の願いが、彼をここに呼び出してしまったのか？

リョウメンスクナとナギたちが戦つた時、相手側は魔力を使って呼び出したと言つていたはず

つまりさつきの急激に魔力が減つたのは、私のその魔力を使って、彼をここに呼び出した
それならついつまが合つ

「…………ん……貴方をここに呼んだのはきっと私」

「やはり、そうか。ラインが繋がっていたのでね」

らいん？

「…………らいんって何？」

わからないのでとりあえず聞いてみる

「君と私の間に魔力バスが繋がっている。……わかるかね？」

私と彼の間を見てみる

実際には見えないが、魔力を共有するような管が感じられる
言われるまで気がつかなかつた

「……わかつた」

「せうか。ならば改めてだが……君を我が主として認めよ！」

私が彼を召喚した

つまり私が召喚主……つまり私が主

「…アスナ。アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフ
ユシア。貴方は？」

「アスナか。私の名は、エム「貴様！何者だ！」「…ふむ、まずは
彼らと話を付けなければならぬいらしい」

魔法使いの一人が私たちの邪魔をする
今忙しいのに…

「アスナちゃん！そこから離れるんだ！」この男は危険すぎる

とタカミチが私に向かつて叫んでくる
離れる？彼から？

私の最後のモノまで奪おうとしたのは貴方たちなのに？
彼は、少なくとも私の最後の叫びを聞いてくれた
私を主として認めてくれた

正体はどんな人間かはわからないけど、少なくとも今は私の味方で
居てくれる
私をヒトとして扱ってくれる
なら信じるほうは決まっている

と、彼の後ろ…タカミチと反対側に隠れる

「つー？あ、アスナちゃん！？どうしてそっち？」「わ、私は…！…
私は貴方たち魔法使いが嫌い！！」「つー？」

タカミチが驚いている

私が隠れている彼も驚いた表情をしている

「私は魔法使いなんか大嫌い！！立派な魔法使いなんていう仮面を使つて、正義という言葉を振りかざして、自分たちの思うようにしていく正義を語る魔法使いは、その中でも一番嫌い！！」

「私が今までどんな風に生きてきたか知ってるでしょ？私の魔力が危険だから！私の魔法を無効化してしまう体質が危険だから！だから私を監禁して封じ込めてたのは貴方たち魔法使いだ！！」

「つー？だから魔法でその悲しい記憶を消して」「つるさああああああああい！！」「つー？」

「私の人生は確かに今まで幸福なんて呼べるモノじゃなかった！でもこんな人生でも、私が唯一持つているモノなの！私が持つてるのは名前と、この記憶しかないのに！それさえ奪おうとするの！？私はもうモノ扱いされるなんて嫌！タカミチたち、紅き翼たちまで私のモノを奪おうとする！そんな魔法使いたちなんて……だあああああいきらあい！！！」

「それに私の記憶がなくなつても私の危険性はなくならない！！何も変わらない！！私が持つているモノがなくなるだけ！！！」

彼らは唖然としている

凄く悲しくなつてきた…涙も出始めた

拭わなー…

何か頭が暖かい…ナー？

上を向くと、召喚した彼が頭の上に手を置き、優しく動かしている

……ナ…ナデテクレテイルノ？

「大変だつたな…私も君と同じ境遇にあつてきたからわかる部分は
多い

だが、今は泣きたまえ

私が君を護ろう。私は君をモノ扱いしないと誓おう
今は泣いていいのだから」

彼が言つ

彼は無言で私の頭を撫でてくれる

「…う…う…うわあああああああああんん！…うわあああああ
ああああああああああああああああああああああああああああ
うわああああああああああああああああああああああああああ
！…！」

今まで我慢してきたものが壊れた
まるでダムのようなものが
涙が止まらない

彼だけは信じていい
彼は私を一生ヒトとして扱ってくれる
彼は私を護ってくれる

彼女の心を救う者が現れたのだから

s i d e o u t

第3話 叫び・彼女の想い（後書き）

さて、アスナを紅き翼とは別陣営に置いた訳ですが

あ、完全なる世界側には所属しません

期待してた方いらっしゃつたら、すいませんへへ；

アスナを原作とは違う性格、記憶残留にしたので、今後もうちょっと原作とは離れたような状態にしてみたいです

次の標的の原作キャラは……やはりあいつだな

次話

第4話 離脱：旧世界へと
どうぞ、ご期待下さい

第4話 離脱・旧世界へと（前書き）

土日は何かと忙しい作者 神衣です^ ^

なんとか4話更新しました！

アスナつて20年前の大戦頃から居るんですよね～
まあこれがこの物語の鍵なのですが！！

第4話 離脱：旧世界へと

side ハミヤ

彼女の泣き声が徐々に静かになり、そして止まった
見た感じ、泣きつかれて眠ってしまったのだろう
やすらかな顔で眠つている
やつと呪縛から解放されたような…
…彼女の人生はそれほど過酷だったのだろう

私には、少なからず彼女の気持ちが少しばかりわかる

私は、英靈となる以前、世界を回っていた
正義の味方になるために
より多くのヒトを救うために

自身が使用する魔術 魔法に最も近い魔術である禁術 固有結界
私の魔術は異端であり、才能云々で出来るモノではない

魔術師…それはモノや事象が起こる発端であり、終端である”根源
”に辿りつくために、神秘を行い、目指す者

我が魔術は異端、ゆえにその魔術を確保するため、”封印指定”に
決定し、私を拘束し、ホルマリン漬けにしようと、数々のたれたちに追われていた
死にかけたのは一度だけではない
死闘に続く死闘

だが、神秘を秘匿することをせず、世界を回る事を私はやめなかつた

エミヤシロウの起源にして誕生のあの焼けるような世界、また正義の味方としての発端である自宅での爺さんとの最後の会話

正義の味方、エミヤシロウの根本である

最期は助けた人々に戦争の原因と罪を被され、断頭台

私と彼女には似通つた点が多い
ゆえに英靈の座から呼ばれたのが、私だつたのかもしれない
触媒を使用しない召喚は、主とサーヴ、アントには似通つた点が多い
桜やライダーのように

さて、このままアスナを寝かせておくのも忍びない
さらにまだ呆然としているとはいえ、敵である彼らの前にいる訳にもいくまい

そして、アスナを左腕で抱え

「では、私たちがこれで失礼しよう」

side out

side タカミチ

「では、私たちはこれで失礼しよう」

その言葉で、私は意識を男に向けることが出来た
誰があの男をここに召喚したかはわからない（アスナとHIMIヤの会話は遠く、声 자체は余り大きくなかったため、聞こえていないため）
し、あの男が何者かもわからない

私は、ガトウさんに彼女を任せられた

彼女が幸せになるためには、どんな苦しみも堪えられる
そのためには、記憶を消失させるのが彼女にとって最善
彼女に嫌われようが、何としても成し遂げる！

「それは出来ない！アスナちゃんは返してもう一つ…」

「アスナが望んでいないのに…かね？」

「だとしてもだ…！これは彼女のためなんだから
何としても取り戻す…！」

戦闘体勢をとる仲間の魔法使いも戦闘の準備をとつた

「……ふむ。ならば力ずくで通るよ」

彼がいふと、上空から剣が降つてくる

な…？これはラカンの…？

降つてくる剣の数は数十。

こちらは自身を合わせ、8名。数でとても勝てる訳がなく、魔法使いたちが張った障壁をも貫き、味方から叫び声が聞こえる

自身に降つてくる剣を屈拳をぶつけるも相殺には至らず、傷つくのは自分

……………アスナちゃん……………

彼女のことを見つめ痛みが限界を向かえ、意識を手放した

s i d e o u t

s i d e アスナ

揺れる中、私は眼を覚ます

状況的に見て、私と私が召喚した彼のみ
移動している状況から見るに、タカミチたちから離れることが出来た……………のかな？

近くにあるのは彼の顔

私が召喚した、私を主してくれた彼

私が信じることにした彼

私を護ってくれる彼

私に安らぎをくれる彼

と私は彼の左腕に抱えられている時、あることに気がいた

私は彼に寄り添うように泣いた

彼に泣きながら甘えた

凄く恥ずかしくなった

凄く申し訳ない気持ちも…

「……ねえ？」

彼に声をかけてみる

「むっ？すまない、起こしてしまったか？」

申し訳ない顔をされた

別にそういう意味ではないのに…

「……貴方の名前は？」

「…そういうえば伝えていなかつたな。私の真名（名前）はヒルヤ

シロウ」

「ん？ イントネーション的に旧世界人？

京都にいた時、彼の名前に似たような名前を聞いた気がする

「……二ホンジン？」

「む？この世界にも日本があるのかね？」

このセカイ？

「……………」
「……………魔法世界。旧世界、現実世界には日本はある。………
えつと……………」
「ミヤ…さん？」

氣恥ずかしく、さん付けで呼んでいた
何を緊張してこらのやら…

「シロウで構わない。私もアスナと呼んでいるからな。それともち
やん付けがいいかね？」

いじわるそうな顔で言つてくるシロウ
アルみたい…

「アスナでいい。シロウ、旧世界に行こう。日本ならシロウも知
つてるみたいだし、魔法世界より追つては少ない」
ととつあえず無難な案を出してみる

「…………ふむ。そつするとどうか。逃げつづけることは無難な案であ
り、私たち生きしていくには一ヵ所に留まるのが一番安全だひつ」

彼はそつと、私たちは旧世界に向かつた

第4話 離脱・旧世界へと（後書き）

この作品を読んでくれている方々、感想をくれる方々、また注意点を頂いてる皆様方、誠にありがとうございます！

皆様からの感想や、アクセスが自分のモチベをあげることが出来ています！

とりあえずこれで旧世界側に行きます

あ、この作品はアスカもかなり強くしますよ？
どんな作品になるのかは…作者にもわかりませんww

前書きにも書きましたが、この作品のキーワードは20年前の大戦時にアスナが幼いながらも存在したという時系列です！

次回

第5話 強く・闇の福音と千の呪文の男
ご期待下さい

第5話 強く・闇の福音ヒトの呪文の男（前書き）

ども

仕事が忙しく、なかなか時間を付ける暇も無い日々を送っていますが、作者の神衣です（・・）！！

通勤時間などの、ない時間をなんとか使ってやつと投稿することができます。

ご感想を頂いた皆様方には感謝しております！

では、どうぞ！

今回長め

第5話 強く・闇の福音と十の呪文の男

s i d e アスナ

旧世界に向かう

普通に考えるなら、それほど困難なことじやない

でも、私たちが旧世界に向かう

それはとても過酷だつた

私たちは追われる身だから

私を捕まえるために

シロウを倒して私を確保するために

私はシロウに抱えられて移動している

私が走ると彼が走るのは、速さのレベルが違う

感卦法が使えても私自身の身体能力が高くないので、余り意味をな

さない

私は追っ手との戦闘には無力だ

私自身の実力が強ければ、自身に降り注ぐ火の粉を振り払うことが出来る

でも私に戦う手段はない

そのせいでもシロウが傷つく

タカミチたち悠久の風は仲間の要求により、多くの追っ手を私たちに仕向けてきた

噂で聞いた話では、シロウに微々たる金額ではあるが、賞金もかけられているらしい

シロウは「気にすることはない。主を護つてこそその従者だ」と言つ

ていたが、私にはそれを納得するのは無理だった

私には、彼に返すモノが何もない

移動には抱えられ、戦闘では足手まとい、食事は彼に作ってもらい、シロウには助けてもらつてばかりいる
主に従うのが従者、その従者の働きに対し、返すのが主
私はまだ幼い。まだ数えで9つ
だからといって甘えるのは嫌

シロウが私の最高の従者で居てくれるのなら、私はシロウの最高の
主でいたい

そのために私は力を望む
彼が苦しんでいる時に彼を護るために
彼と並んで歩くために

シロウは剣を取り出したり、弓で戦つたり等、変わったアーティファクトを使うが、泳唱するは「投影・開始→トレー・スオン」と
「I am the bone of my sword」だけ
教えをこいてみたけど、これはシロウしか使うことが出来ない技術
らしく、身につけることが出来ない

なら私に出来ることは何か

私が使えるモノは、この魔法無効化能力と感卦法、気、魔力

魔法無効化能力は戦闘で動けなければ、使いようがない

感卦法は身体能力を極限まであげる究極技法。相殺しあう魔力と気を混ぜ合わせることで行うことが出来ることで使うことが出来る私は幼い頃から出来ていたが、自分の身体が出来上がりつてないので、身体を鍛えるまでは無理

年齢的にも今は限界がある

氣は身体強化とかや武器に纏わせる力

身体強化は緊急時以外は感卦法でいいし、武器を持ってない今は使えないし、習得するのにかなりの時間是有する

魔力は、杖を媒介に詠唱を行い、神秘を起こすもの
子供でも魔法を習う時代

私の魔力で出来るか心配だけど、まだ可能性は十分ある
魔法を使うのは抵抗がある。私が嫌いな魔法使いになるのだから
だが、背に腹は返られない
問題は誰に習うか

いた

正義を語ることのない悪を語る魔法使いが

だけど、どうやつたら彼女に会える?
どうやって彼女に教えをこなす?

とりあえず彼女を探そう
闇の福音を

彼女はどこにいるか…

あ、そういうえばタカミチがナギが彼女に追われているという話があ
つた

「ナギも大変だな」と言っていたのが印象的だったし

ナギがいる場所…ナギがいる場所…

わからない

しょうがない、詠春に聞いてみよう

まだ旧世界に情報が回っていないことを期待しつつ、私はシロウに声
をかけた

side ハミヤ

なんとか転送ポートにたどり着き、旧世界へと着いた

アスナが私に魔術を教えてほしいと言つてきたが、私には教えることは出来ない

魔術……この世界でいうところの魔法と私が使う魔術では神秘の行使方法が異なるようだ

私たち魔術師は魔術回路を開き、そこに魔力を通し、世界に神秘を呼ぶ

彼らは、杖を媒介に魔力を通し、世界に神秘を呼ぶ

彼らの魔法は泳唱がほぼ決まっており、魔力と呪文さえ使い、杖を使えば皆同じことが出来るらしい

魔法の射手がいい例だな

彼らにとつてはたいしたことはないのだが、私からすれば一番マズイのはあれだ

空中浮遊

キャスタークラスでなければ出来ない高等魔術を簡単にやつてのける
あれは私たち魔術師からすると異常に値する

全く異世界とは怖いものだ

アスナが知り合いに会いに行くと言つてきたが、知り合いといつことはアスナの危険性を理解しているに等しい
捕まる危険性を聞いてみたが、この世界にまだ連絡が来てない可能性が高いという

二つの世界が連絡をとるのは凄く時間是有するらしい

その人物に教えをこうのかを聞いてみれば、違うという
教えをこう人物の居場所を知っている可能性が高いことだ

話をしている間にアスナの知り合いがいる京都に着いた
そこはキャスターが張った結界に比べれば程遠いが、なかなかの結界が張つてある

その知り合いの仲間だらうか
どうやら彼らもアスナを知つてゐるらしい
アスナの知り合い……詠春というらしいが、サムライマスターと呼ばれた英雄らしいが…

ふむ…私と同年齢ぐらいの人物が出てきたが…彼がその詠春らしい

「……アスナくん、彼は誰だい？」

警戒心を持った眼で私を見てくる

ふむ、なかなか人を見る眼はあるらしい
流石英雄と呼ばれた人間か

「タカミチの変わりに私の警護をしてくれている人……詠春、ナギ
の場所知らない？」

反応から見るにまだ魔法世界からの連絡は来ていないようだ
アスナが教えをこう人物はナギというのか？

「ナギですか……。確か関東魔法協会の理事長、麻帆良学園の校長
に呼ばれていたはずですから、麻帆良にいるはずですよ」

「ん、麻帆良ならわかる」

目的地が決まつたらしいな

「詠春殿。高畑・T・タカミチ様から連絡が来ていますが」

仲間の一人が声をかけた

マズイな

「ありがとう」

アスナがいなり、彼女を抱える

「ア、アスナくん！？」

急いでここから離れなければ…

追っ手が来る前に

side out

side HVA

「なあ そろそろ俺を追つのはあきらめて、悪事からも足を洗つたらどうだ？」

「やだつ

私の名はエヴァンジエリン・A・K・マクダウェル
600年以上も生きた、吸血鬼の真祖にして悪の魔法使い
かの有名なサウザウンドマスターに興味があつてやつを追つかけて

きたが、まあかこんな落とし穴などとこつ古典的な罠に嵌まるとは…

「ヤーかそーか、それじゃ仕方がない。変な呪いをかけて一度と悪のできない体にしてやるぜ」

ゴーパ、ゴーパ…

「うひ…何だ?この強大な魔力さ」

!?

「バカやめろ!…そんな力でテキトーな呪文を使うな!」

「確かじじいが警備員欲しがってたんだやな。えーとマンマンテロテロ…長いなこの呪文」

マズイ

あんな魔力でやられたら…

「たつ…助けて!誰か助け

奴に制止の声をかけるが、止まりそうにない。そして救助を呼ぼうとした声はある音に焼き消された

近づいてくるのは光の一線

ナギは危険を感じ、回避に回る

光が地面についた瞬間

世界から音が消えた

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオーンンンンンンンンンンンンンンンンンンンンン

光が着いた瞬間、起きたのは爆発

今の光が呪文を止めたのは事実だが

あんな爆発を起こしたのは誰だ

地面には深さ1mほどのクレータが出来ていた
これほどの威力を出したのだ。なかなかの実力者だろう

そう思つていると、地面に着地する人物がいた

白髪、褐色系の肌、ボディアーマーに赤い外套を着た男
その男は片腕に、ツインテールで赤と緑のオッドアイの金髪の少女
を抱えている

「姫子ちゃん！？」

なにやらナギが驚いているが…知り合いか？

トスッ

腕にいた少女が地へ降り立つ
そしてその少女が自身に向かってくる

「……貴様、何者だ？」

「初めまして、闇の福音。私はアスナ。アスナ・ウェスペリーナ・
テオタナシア・エンテオフュシア」

私が闇の福音と知つて、近づいてくるか

ん？エンテオフュシア？

災厄の魔女と同じ名前？オスティアの王族なのか？

ああ、なるほど

「貴様が黄昏の姫御子か……完全魔法無効化能力者」

「そう

なるほど…

「その黄昏の姫御子が私に何のようだ? ただ世間話をしたきた訳ではあるまい。ナギに会いにきたのならこちうに近寄つてくるはずもない」

「闇の福音。気高き、悪の魔法使い。私は貴方に

魔法の教えをここにきた

ここにはいつたい何を考えている

私に 魔法を ここにきた だと?

「貴様、何を思つて私に魔法をなんぞ考えている!! 魔法だと? 魔法の教えなんぞ、貴様ら正義の魔法使いに習つ人間など腐るほどい るだらう!!」

私は悪の魔法使い。吸血鬼の真祖にして悪の象徴
なぜここには、私に魔法をここおつなんぞといつ考へに至る…!

「私は、正義を語る魔法使いが嫌いだから

正義という仮面をつけて、立派な魔法使いなんて変な肩書きを持つて、自身を正当化して、思うようにやる魔法使いが嫌いだから

だから私は闇の福音に魔法を習いにきた

なるほど…こい眼をしている

そして貴様も世界の正義の歪みに気づいているのか
世界の正義なぞただの理想を掲げた傲慢だと

昔の自分を見ているようだな

ふむ、なら…

「……いいだれつ。貴様のその意思なかなかのものだ。それに助け
てもらつた貸しもあるからな」

ペコッ

「あつがとうござります、闇の福音」

なるほど、礼儀はある程度出来るようだな

「…アスナといつたか。もし、私が断つていたのなら、どう「その
時は私がどうにかしよう」…貴様がか？」

話に割り込んできたのはアスナを抱えていた白髪の男

「吸血鬼の真祖にして不老不死の私に要求を通す自信があると…
のか？何かいい交渉材料でも持ってきたか？」

私もなめられたものだ。こんな男にそうやすやすと思われるとな…

「なに。無理なら痛い眼にあうか、死んでもうつだけだよ」というなり、男の左手に長い鎌が現れる

転送系のアーティファクトか？

「その程度の武器でな……」を

「ほつ…流石といったところか？いや、不死としての体が反応した
か」

あれはまざい

あれを食らつてはならない
あれに歯向かつてはならない

あれは

あれには私の不死は通用しない

なぜならあの鎌は

不死殺し

ふつ

「…なるほど、選択を間違つていなかつたのは私のようだな…」

「やつこつことだ。話がわかりやすくて助かる」

しかたあるまい

「そういえば、貴様の名はなんだ？そしてそれ程のアーティファクト、どうやって手に入れた？」

「ふむ、ならば質問に答えよう。私の名はミヤ シー「お前、完全なる世界の生き残りか！」「…どうやら私の名は遮られることが多いらしい」

チツ、ナギめ、邪魔しあつて

side out

麻帆良に揃うは、千の呪文の男、闇の福音、黄昏れの姫御子

ネギまの世界の登場人物にして鍵を握る人物

そして黄昏れの姫御子に召喚されたイレギュラーにしてイレギュラー

歪みが歪みを呼ぶなか、世界は徐々に変わっていく

鍊鉄の魔術師

第5話 強く・闇の福音と十の呪文の男（後書き）

エヴァが麻帆良に封印されたのが原作の15年前
現在アスナが9歳

さて、原作時のアスナの年齢は？ w
ここがこの作品の原作とは大きく異なる点
わかる人にはわかる

原作の時点での時間軸の矛盾点

今後ともよろしくお願いします（^ ^）ノ

次回

第6話 交渉・千の呪文の男 vs 練鉄の魔術師
お楽しみに！！

第6話 交渉・千の呪文の男VS鍊鉄の魔術師（前書き）

大変お待たせしました！！

作者の神衣です（・・）！！

年末や仕事が忙しく更新が大変遅れましたw

構想上に問題があつたので、修正して再投稿
では、どうぞ！！

第6話 交渉・千の呪文の男▽S鍊鉄の魔術師

s.i.d.e Hミヤ

「…アスナといつたか。もし、私が断っていたのなら、どう「その時は私がどうにかしよう」…貴様がか？」

「吸血鬼の真祖にして不老不死の私に要求を通す自信があるとこうのか？何かいい交渉材料でも持つてきたか？」

「なに。無理なら痛い眼にあうか、死んでもらうだけだよ」

投影で複製するのは鎌の形状をしたとある宝具

「その程度の武器でな……こ……を……」

ニヤツ

「ほつ…流石といったところか？いや、不死としての体が反応したか」

目の前の少女、不死の吸血鬼が固まっている
いや、むしろ固まっているのが、当たり前の反応だろう

私が投影した宝具

それは

ハルペー

古代ギリシャの時代、不死の化け物メテューサを殺すため、神がペルセウスに『えられたという断頭の鎌

不死殺し

の武器である

「……なるほど、選択を間違つていなかつたのはどうやら私のようだ
な……」

「そうこうことだ
話が早くて助かる

「そういえば、貴様の名はなんだ？そしてそれ程のアーティファクト、どうやって手に入れた？」

「ふむ、ならば質問に答えよ。私の名はHAYASHI Hiroshi お前、完

全なる世界の生き残りか……」…「どうやら私の名は遮られる」というらしい

ナギ・スプリングファイールドだったか…

「生憎、私は完全なる世界などという組織に所属した覚えはないのだがね」

「なら、何で姫子ちゃんがこんなところにいるんだよつ……それにタカミチはどうした？ あいつは一緒にねえのかよ…」

「ふむ… 何故アスナがここにいるのか？ と聞かれればアスナの意思でここに来たと答えるしかないし、タカミチとかいう人物と何故一緒にではないのか？ と聞かれれば追つてきている人物と一緒にいる訳がないだろう」

あえて、タカミチの敵という答え方をすることで、相手の冷静さを推し量り、挑発するべとなるアスナを横目で見ると、ア然とした顔をしていたが、私の心理がわかつたのか、その顔は苦笑へと変わっていた

「な！？ … てめええええええ！」

といい、敵は突っ込んでくる

相手の実力を推し量ることもなく突っ込んでくる

こいつ、本当にこの世界の英雄か？ アスナから聞いた紅き翼の実力とはその程度か

相手を迎えつつためにハルペーを破棄し、自身が愛用する中華剣を投影する

帝に献上する剣を作るために、鍛冶師干将が作成するが、鉄が上手

く固まらず、中々完成しない。その剣を完成させるために、妻莫耶が神への供え物となるため、炉の中へ飛び込み、妻が死んだ悲しみを嘆き、鉄をついて完成したと言われる中国の名剣

陽剣干将、陰剣莫耶

通称、干将莫耶

新たな剣に警戒をするも突っ込んでくるのをやめないナギ・スプリングファイアード

まず、とんできたのは右ストレート

干将で受けるも肉を切るような感覚はない
次々に攻撃がとんでもくる

左フック、右ミドルキックに顔面を狙った右ストレート、右を振った勢いを利用した左の裏拳、さらに空中に飛んでの右ハイキック、空中にある体を捻つての左踵下ろし

干将と莫耶を使って面で受けるのではなく、線で受けるが、相手が痛がっている姿は感じられないし、血が出ている様子も見られない
ならば相手が身体強化、もしくは障壁らしきものを張つて攻撃してきていると考えるのが妥当だらうと当たりをつけた

速度はたいしたものだ

ランサーには若干劣るが、少なくとも皿身と同等、もしくは皿身より速い速度で拳を振つてくる

この世界の魔法使ひとやらは全て遠距離魔法を用いて戦つてみると

思っていたが、その考えは改める必要がありそうだ

今まで戦ってきた魔法使いは全て遠くから咏唱しての攻撃だったが、この男 ナギ・スプリングフィールドの近接戦闘は十分な戦闘経験をつんだものであり、実戦戦闘に出すのには申し分ない

近接戦闘を続けて約3分ほど、速度が相手が若干ながらも上回っている以上、相手の手数のほうが多く、こちら側に隙が出来る

「おらああああああ！」

出来たのは小さな隙。開いたのは右脇腹
自身に有利な状況への大きな鍵
振られたのは左フック

当たると信じて振られたその拳が…

キンッ

「なっ！？」
当たらなかつた

その瞬間を間に攻守が替わった

剣を振るのは円を描くような線の軌道ではなく突く点の軌道
双剣の短さを利用した小回りの効いた手数の多い剣撃により一気に優勢に入れ替わったのだ

その小さな隙

それが一流である英靈HIMAYAが一流に太刀打ち出来る技能
わざと隙を見せ、相手の攻撃を誘導する
その隙を境に攻勢へと移る命懸けの秘策

一流であることに絶望するも、一流に妥当するために努力に努力を
重ね、身につけた力

速度はほぼ互角状況がどんどん悪くなる状態に

「ああああ……つぜえ……」

ナギが腕を掴み、自身を後方へ投げた
悪くなる状況に苛立ちを感じつつも、状況を仕切り直すために相手
との距離をとられる

「むっ」

投げられる中、持っている干将莫耶を相手へ投擲する

相手は普通に防ぎ、双剣は相手後方へ飛んでいく

「お前やるじゃねえか！敵じゃなかつたら、仲間にしたいぐらいだ
ぜー！」

「英雄にそこまで言われるのは確かに嬉しいが、生憎敵に塙を贈る

ほどの善人ではないのでね

「くつ、やつぱぱ思つよつには行かねえか」

「……そんなことを言つては、そり、首が跳ぶぞ」

「なつー?」

何が起つたのか

先程後ろに飛ばした双剣が円を描き、飛来してくる

千将莫耶

黒と白の夫婦剣は、引き付け合つ力がある

「つおつー」

上に跳躍して避ける

「すゞえじやねえかー! ラカンの武器にはたいした能力…は…」

剣の能力に喜びを感じたのか

空中に浮き、相手のほうを向いてみれば

そこには「」を構えている白髪の男がいた

番えているのは、白い等身をした捩くれた剣

「我が骨子は捩れ狂う……偽・螺旋剣！－→カラドボルグ－」

放されたのは、古代ケルト神話に出てくるアルスター戦士、フェル
グス・マク・ロイの所持する愛劍

虹の端から端まで伸び、一降りで丘の天辺を三つも切ると言われる
名剣

それを矢として使用するために自身でアレンジを施した宝具

音速に迫るような速度で迫る一撃
とつたに障壁を張る

が、そんな障壁を貫くことはたやすい
それは貫くことに特化した一撃なのだから

とつたに体を捻ることでかわすが……

「壊れた幻想へブロークンファンタズムへ」

起きたのは爆発

宝具に込めた魔力が爆破へと変わった

それは先程地面にクレータを作った一撃

線ではなく、面での攻撃は確かにダメージを与えた

フードは所々やぶけ、肉体にも大きな火傷の痕が見える
多少なりとも体を動かすことに対する制限は与えられただろう

「このやううつ……！」

μ

s

.

s

.

s

,

s

契約に従い、我に従え、高殿の王。来れ、巨神を滅ぼす燃え立つ雷
霆。百重千重と重なりて、走れよ稻妻」

仕返しにと唱え始めたのは、雷系最大の威力を持ちえる超広範囲雷
撃殲滅魔法

「『千の雷』……」

なんの魔法かはわからないが、避けねばいいと思つていたが
放たれた魔法は見るからにも避けられる範囲の魔法ではなく、確實
にしとめるものだろう

自身が持つれる盾である『熾天覆う七つの円環』ロー・アイアスく

は投擲系の攻撃に対して絶対的な防御力を持つ宝具
神秘で呼び出した自然とは言いがたい雷に対する効果は期待できない

ならば

「投影開始>>トレース・オン<」

取り出すは

立花道雪を雷が襲つた時、道雪は所持していた刀
千鳥とも呼ばれ、その剣でその雷（雷神）を切つたとされる雷を切
る概念を持った剣

「雷切>ライキリ<」

放たれたは雷は相手に到達する寸前で

切られた

そして霧散し、消失した

辺りは静まりかえっている

ナギは自分の最も威力を有する魔法を抑えられ、エヴァンジエリンやアスナもこの光景には驚いていた

防ぐかと思われたその呪文は、予想とは違い、『切られた』のだから

「何なんだよ！…てめえはあああああ！…！」

遠距離呪文を辞めたのか、近接戦闘のために突っ込んでくる
だが、先ほどのダメージが残っているのか、速度やキレは先ほどの
ものほどではない

無傷で互角に戦つた相手に手負いで勝てるはずがない

振られた拳はかわされ、返されたのは振り下ろされた肘打ち

「ぐはあああああ！…」

地面に叩きつけられる

そして持っていた長刀を振り下ろ…

「待たれよ！…！」

されることはなかった

声のするほうを向けば十数名の魔法使いとその代表と思われるぬらりひょん

「邪魔をしてもらいたくないな。私にはこいつを殺す理由があるのだが？」

「やめてくれ……その男を殺すのは……！」

変わりに何か案を出そう……交渉したい……」

s i d e o u t

英雄同士の戦い

勝つたのは鍊鉄の英雄

この世界で最強と謳われた人間が負けをきした

この結果がどう世界に影響を与えるのか

to be Continued...

第6話 交渉・千の呪文の男VS鍊鉄の魔術師（後書き）

さて、出てきましたわねうりひょんわわ

では次回

第7話 交渉締結：主と従者
お楽しみに！！

第7話 交渉締結・主と従者（前書き）

新年初めての投稿になります。遅れましたが、あけましておめでとうございます（・・）！！

いやあ、大晦日にPCのOSがぶつ飛んで、それを修復する作業を行っていたら、正月早々高熱の風邪を引き、死にそうな目にありましたよ！ハハハ！

まあ仕事始めには間に合ったのが唯一の救いでしょ？（^ ^）
今回どうも前話でお伝えしたタイトルにするにはまとまりが悪かったために、まとまりが良い部分までやつていると結構な時間がかかってしまったのも、今回投稿が遅れた原因となっています

麻帆良に15年後の原作開始までのおおまかな流れは頭の中に出来上がっているので、それをどうにか文章にあげていきたいと思います
原作通りに行くか、オリジナルシナリオにするかはまだ未定も未定なので、よろしくお願いします。

では、どうぞ！ もう少し文才が欲しい…

第7話 交渉締結・主と従者

side アスナ

正直驚くしかなかった

確かにシロウは強い

追っ手に追われてる時に多くの追っ手を排除してきた

そりこええばシロウは追っ手を殺すことはしなかった

シロウはきっと沢山の人を殺したことがあるのだろう

でも、何故殺さなかつたのか

殺して怨みを買わないとめなのか、私が幼いから私の前だから殺さないのか

多分両方なのかな？

シロウは基本的に優しい

気の使い方が上手く、他人を気遣う心もある

でも、たまに心配になる時々シロウが遠い眼をする時がある
何故そう思うのか、私にはわからない

でも、シロウが唐突に消えてしまつのではないかと思つてしまつ

私はどうすればシロウを主として和らげてあげられるのか

話がずれた

戾そう

シロウは強い

でも、まさかここまで凄いとは思いもしなかった

放った矢（剣？）の強さ、ナギと互角に戦う戦術、そして闇の福音を黙らせる何かやナギの大魔法を打ち消す力

正直異常としか言いようがない

少なくともシロウの実力なら有名になつていないとおかしい

何故それほどの力があるのに今まで奮わなかつたのか

何故何の契約を行つていない私が彼ほどの使い手を呼び出したのか

わからないことだらけ

でも…

「やめてくれ！……その男を殺すのは……！変わりに何か案を出せ
う……交渉したい……！」

「おっと私に出来ることをさせれば…

何か見えてくると嬉しいよつ

そつ悪いながらの瞳に向かって走り出す

s i d e o u t

s i d e H I I A

アスナが走つてくるが、止まるや否や

「シロウ……交渉を受けよう？ナギぐらこの男を交渉の手札に出せば、きっと良い状況へもつていける」

確かに良い判断である。だが…

「ふむ……やうするには構わないが、アスナ……君は下がつていれ。危険すぎる」

「嫌。私はシロウの主だよ？交渉には参加しないといけない。もし、危なくなつたら、好きにしていいから。私の魔力も貸すから」

…………アスナも頑固といつことか

仕方あるまい

73

「……仕方あるまい。その翁。交渉をしたいと聞いたが？」

要求してきた翁に問う

「……ひからとては用件はないのだが？どちらが交渉の場で有利か、理解出来ているのかね？」

危険を感じたのだろう

「す、すまぬっ！勘弁じゃ……」ちらから最大限の提供をしよう…

！」

慌てて取り繕うようこうこう

ふむ、ならば

「じちらとの不干涉を結ぶ」

アスナがいつ…が、まあ妥当な案だな

「…ふむ、ならばじちらとの干涉はやめて貰おう。余計な接触もだ」

「不干涉には闇の福音も含む」

アスナに魔法を教える人物なのだから、彼女に危険があつては意味がない

「ぬつ…？それはいかん！…どう考へても危険すぎる…」

そこで割り込んでくるか

まあ確かにこの真祖が悪を語つている時点で余り安全とは言えん
私も人のことはいえんが…

だが、余りにも甘すぎると

「状況がわかつていいないのか？対等の交渉ではない。じちらからそちらへの不干涉を結ぶのだ、そちらに被害を出すわけがなかろう。真祖、君もそれでいいかね？」

「む？……まあ、貴様らが私といるのならば退屈はせんだろう。
仕方がない。受けてやる」

「……ひしいが？」

「そ、それなら構わん。学園に影響が出ては困るからのう」

次は…

「次に表の仕事と、居場所を提供してもらおうか。仕事といつても貴様らの配下ではない仕事だかね。真祖、君は裏の仕事のほうが多いかね？」

「……その真祖などという喉に引っかかるような名で呼ぶな。私にはエヴァンジエリン・A・K・マクダウェルという名がある。……裏で構わん。表は面倒だからな」

「……ならばエヴァとでも呼ぶとしよう。翁、どうかね？」

「ふ、ふむ。……居場所もわしらの監視下ではないのじゃひいつへ」

「当たり前。じゃないとさつきの不干渉が成り立たない」
「当然だ。むやみな干渉を控えるのだからな。裏で関わつてくれるようなら容赦せんがね

「アスナの言つとおりだ。何故貴様らの管理下に着かねばならない。私たちは貴様たちに有利な状況はあっても不利な手札はないのだからな」

「ぬぬぬっ…… 麻帆良内はわしらの管理下じゃし、 麻帆良の外はわ
しらは管理下ではないため、 無茶な干渉出来ぬのじゃよ」

それでは全く意味がないな

……ならば

「ならば、 大量の資金と、 私とアスナ… ハウ、 アはいらんか。 二人
の偽装の戸籍の用意、 後は魔法世界からの追つ手の停止と魔法世界
からの私たちに対する抑止力となることだ。 これで十分だろう。 職
は自分で見つける」

「魔法世界からお主たちに対する抑止力になるじゃとー? そのよう
な無茶が通る訳がなかろ? つー!」

やはり甘いな

この翁、 余りにも絶望的な状況になつたことがないと見える

実際に程度が低く、 苦しそう

「ならば、 この男の首がとぶだけだ。 これ以上妥協はせん。 なに、
英雄様の命がかかっているなら、 魔法世界の管理者も首を縊に振ら
ずにはいられまい。 …… ああ、 後、 大量の資金はだが、 …… 額は一千
万にしよう。 魔法世界に交渉すれば、 いくらかの金は手に入るだろ
う」

「…………」

無茶苦茶な案を出したものだと我ながら思う
だが、ここまでせねば良い状況には持つていけない

関東魔法教会に対する条件は十分、偽の戸籍での表世界への安全の確保、魔法世界からの追っ手の除去や自身が最も嫌いとしている言葉 抑止力にすることが出来る

関西呪術教会……だつたか？それに対する案は後で考えるとして

それにしても氣絶しているこのナギ・スプリングフィールドという男

魔法関係には、最高のカードといえるだらう
魔法世界を救つた英雄か……

にしても、視線が痛いな

敵陣からは怒気や殺氣の嵐

アスナは特になにもないが、エヴァからは呆れた視線が飛んできている

「……ムチャクチャダナ、アノ男、ケケケ」

「黙つていろ、チャチャゼロ」

あの人形はエヴァの従者か何かか？

「……少々時間をくれんかのう？魔法世界を説得せねばならん」

「却下だ！これ以上何か手を回されては困る。」いつが意識を取り戻した後、暴れるのを対処するのも面倒だしな。今ここで決めたまえ

「

「

話が進まんな

「拉致があかんな。残り10秒以内で決めたまえ。決まらねば拒否とみなし、こいつを殺そう

「ま、待つんじゃー！」

「先ほどは譲歩して止めたのだ。そちらの意見を飲む必要が見当たらんがな」

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10

「 2

」

「 1

」

「ゼ」「わかつたつ……確かに了承した………じゃから、
ストップじゃ……！」

やつとか

「『交渉成立』だ」

「ならば、翁、制約を敷いてもらおう。戸籍と一千万もすぐ用意に取り掛かり、明日午前9時にここに用意された時点で、この男を引き渡そう。…先に言っておくが、ふざけた経歴や後で戸籍を削除し

よつ等や変な手を回すつ等と思わない」とだ

「の大きな結界、これは感知と守りのために張つておるのだらうが……」
「の程度の結界、破壊するなどたやすいからな」

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

エヴァや相手の魔法使いが叫んでいるが……まあ気にするまい

「出鱈目だと思つなり、試してみても構わんぞ？」の結界、完全に
破壊してみせよ！」
これも有効なカードとなつたか
ならば上々だ

.....

⋮

「相分かつた。そちらの条件、寸分違わず用意しよう……」

「話が早くて助かる」

この翁は交渉経験は多いのかもしかんが、交渉に対応する幅がせま
すぎる

次回交渉するのならば、もう少し交渉の経験の積むか、より交渉に
長けた人物を連れてくるべきだな

「その前に問いたい。わしは近衛近衛門といつのじやが…おぬしは
何者じや？」

答える義理はない…が、さっきからのアスナの声を聞いて名前は大
方知られただろう

「エミヤシロウといつ

「名前的に日本人のようじやが、君はどうの出身かの？」

「それを答える義理はない」

これ以上の情報を相手に開帳する必要性がない

私たち魔術師、この世界では私だけだが、基本交渉においては基本
等価交換がベースだからな

「…………相分かつた。戸籍の件じやが、名はどうするかね？」

「私はそのままで構わん。近衛の衛に富司の富、武士の士に太郎の郎で衛富士郎。……アスナは……私の義妹で衛富明日菜にしてくれ」

「シロウー？」

アスナが叫んでくるが、まあアスナの基準上これはNGとなる
が……

「アスナ、君の名はある意味有名すぎて危険すぎる。隠れ蓑になる名が必要だ。君の名を捨てる必要性はない。仮初めの名だと思って構わん。安心したまえ。君の名は、エヴァや私がしっかりと知っているし、忘れることはない」

「…………分かった。シロウが家族扱いといつことなら別にいい」

かなり時間を使って考えたが、何とか納得してくれたようだ
彼女の起源にして原点

自分を対等に人間として接する

「これは守らねばならん

「といふことで頼む」

「……了解じゃ」

「私は年齢……23、アスナは9。アスナの年齢なら義務教育の歳だが、今は学校に通わせる気はない。正直危険が多すぎるのよね。よくて中学からだ、それまでは私が勉強を教える。私は適当な大学卒業までの経歴と車の免許だけで構わん」

「勉強を教えるだけの知識があるのかの?なんな」「結構だ」
「わかった」

これ以上相手の優位な状況への誘導は意味がない
受ける理由は皆無だ

「……それでは失礼しよう、アスナ」

「ん

とアスナを抱える

「待つのじゃ!――ナギ君の安全の保障!「危害を加えるつもりはない、暴れれば黙らせるがな」……わかった」

まあ被害者の安全の確保……まあ今回は加害者になるのか?は重要な点ではある

「ではな……」

そして、私たち ヒミヤシロウ、アスナ、エヴァとの従者はこの場を離れた

s i d e o u t

学園長室

s i d e 近衛門

「学園長……何故あのような要求を受けたのですか……」

「仕方あるまい。彼はナギ君を抑えるほどの実力者じゃ。わしらが戦つて勝てる見込みは少ない。たゞ、ナギ君の命とあつては仕方ないじやろ?」

「ですが!!」

「君はあの状況で打開できる内容があると思うのかの?相手の機嫌

を損ねたり、こちらが飛び込んだりすれば、ナギ君の首は飛び、彼一人でも勝てる見込みが少ない状況の中、あの闇の福音とも呼ばれる吸血鬼の真祖の相手をして勝てるはずがない。…この件はわしが全責任を持つ。明日の朝までというタイムリミットもある。そちらのほうの手を回してくれ。……以上じゃ

「…………わかりました」

魔法関係者の教諭は出ていった

H///ヤシロウといったか…

彼は何者じゃ

ナギ君を抑える実力や戦闘経験を持ち、複数のアーティファクトを巧みに扱い、交渉に関してもかなり長けた人物

それ程の実力ならば少なくともなんらかの足が付くし、名は知られないはずがない

学園に戻り次第、早急に彼の経歴を調べたが、出てくるものは何もない

魔法世界と旧世界両方にじや

悠久の風からきた情報によると、彼はアスナ姫の召喚により現れた
といつ

目撃証言もアスナ姫が召喚したと思われる後にしかない

今までの経歴や足跡がない

まるで今まで存在しなかつたように

じゃが、召喚において仮契約等の契約が必要不可欠

タカミチ君たち、紅き翼の証言によると大戦後に彼がアスナ姫に接触した経歴はないという

ならば、大戦よりも以前に接触があつた可能があるが、MM元老院経由で王族に聞く情報によれば接觸どころか、会うことも出来なかつたという

じゃが、契約が行われていたと考へねばつじつまが合わない

契約が行われているならば、召喚も可能じゃし、複数のアーティファクトを所持していたのも納得がいく
かのジャック・ラカンのように

わからんことが多いすぎる

どうしたものかのう

s i d e o u t

s i d e アスナ

魔法使いから離れた後、着いたのは麻帆良に着く前に見つけた空き家

シロウはナギを赤い布で縛り、別の部屋へ置きにいった

今私がいるのはこの家の居間に位置する場所

今ここに居るのは私、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エントオフュシアと悪の魔法使い、人形使いや闇の福音などの名を冠する吸血鬼の真相、エヴァンジエル・A・K・マクダウェル、そして着く最中に紹介された身の丈以上の剣を持つ彼女の従者の人形、チャチャゼロ

にしても凄い面子が揃つたものだなあ…と思つてゐるとシロウが戻つてきた

「さて、話さなければならぬことがあるそりだが…まずはその前に…」

「まずは状況の確認が先だらう。何を話すとこうのだ…。」

エヴァの言つとおりだと思つただけで、他に何があるのか予想がつかない

「アスナ……すまなかつた」

「え？……あ…」

何のことかわかつた

これは私とシロウしか知らないこと

シロウが第一に守るうとして、いつも考えていてくれること

「私は君に「大丈夫、気にしないで」…本当にすまない」

シロウはさつきの交渉の口籍のことを言つているのだ

「大丈夫、シロウは私を一人のアスナとして見てくれてるし、私を一番理解してくれるよ。今回から仮初めだけじ、シロウとは義兄妹つてことになるけど、よろしくね」

エヴァは意味のわからないといつ顔をしている

私の思いの原点 私の魔力や体質を気にすることなく接してくれることを願う この思いを理解してくれているシロウをこれ以上追求してはいけない

シロウは従者とは関係なくそういう風に接してくれている

これからは私が返していく番

一人の人として
一人の主として

「……すまない……いや……ありがとう」

「うん……」

「さて、では本題に入るとしよう。まずは私のことについて……だつたか」

「当たり前だ!! ハミヤシロウ！ 貴様、いつたい何者だ！！！ あれほどの魔力が込められた複数のアーティファクトを用いながら、どうやってなりを潜めていた？ や、まずはビヤッやつて手にいた？」

「私も聞きたい。正直私はシロウのこと、何も知らないに等しいし」「なー？ 貴様、何も知らずにこんな見ず知らずの人間と一緒に過ごしてきたのかー？」

闇の福音が驚いている

確かに言われば、不思議ではある
でも、シロウの雰囲気や接し方のお陰で余り気にすることがなかった
それが原因だらう

「まあ、まずは自己紹介から行くとしようか。ハミヤシロウ、魔術師だ」

「魔術師？何故そのような昔の呼び方で呼ぶ？魔術師と魔法使いは同義だろ？」

ビクッ

身体が自然に警戒する

シロウはあんな人間たちと一緒にじゃない

そうわかつてはいるけど、どうしても反応してしまう

「少々認識の違いがあるな…。まずはこちらを話すべきだったか。私はこの世界とは別の異世界から来た魔術師だ。こちらの世界の定義とは異なる」

「「な（え）ー！？」」

異世界？

「貴様！！そんな嘘が通う」まずはこいつの話をある程度聞いてから発言して欲しいのだが？」「へつ……続ける」

質問は後にまとめてする

そつこつ風に場の雰囲気が出来た

「まず、私たちの世界には魔法世界などといつものばんは存在しない
次に、この旧世界には、関西呪術教会と関東魔法教会などの巨大な

組織が存在するが、私の世界にはそのような名の組織は存在しないし、麻帆良という有名な地名も存在しない。私の世界で大きな組織と言えばロンドンの時計塔ぐらいなものだ

次に、この世界の魔法使いの基本的な定義は、陰ながら魔法を行使し、人間の手助けをするものようだが、私たち魔術師の神秘は、基本的に公のために使われるものではない

私たち魔術師は、万物の始まりにして終焉、この世の全てを記録し、この世の全てを作れる、あらゆる出来事の発端とされる座標。神秘学によると、この世界の外側の次元論の頂点に在るという“究極の知識”や真理とも称される”根源”へ至るために、お互いの魔術を公開することなく研究をし続けるものだ。そのため、魔術の神秘の秘匿にはかなり厳しく、一般人による発見には相手の状況関係なく速やかに記憶の消去、もしくは殺害を行う

その家の魔術はその家のものだけに引き継がれる

私たちの世界にも確かに魔術師とは別に魔法使いがいる
人数はたつたの5人

私たちの世界の魔法とは、魔術師たちの最終到達目標”根源”にたどり着き、その時代でどんなに資金や人員を裂いても実現不可能な出来事を神秘の行使で行うことで可能とするものをいう

私も実際には見たことはないが、『無の否定』『並行世界の運営』『魂の物質化』『時間旅行』『魔法・青』がある。『魔法・青』に関する情報はほとんど知らない

私たちの世界の定義からするならば、この世界の魔法は魔術に当たる

次に、この世界と私の世界では神秘の行使を行う方法が異なる
この世界では魔力を杖という触媒を用いて、世界に神秘を呼び起こすが、私の世界では魔術回路という擬似神経に魔力を通し、「世界

にあらかじめ定められているルール」を起動・安定させ、神秘を起こす

大まかな説明は終了だ。何か質問はあるかね？」

「 「 「 …… 」 」 」

正直ア然だ

正直シロウがいうことは嘘出鱈田の内容でしかない
しかし、シロウが嘘をついているようには感じられない

もし、シロウのいう通りの世界が存在するなら、それだけの大きな
違いが複数個あるなら、それはまさに別のもの

え？

別の……

世界に……

シロウは住んでいた

!?

私はある」と云はついた

「シロウ……！」

「……何かね？」

「じゃあ、私は貴方を異世界から呼び出して召喚したところの……？」

「やうだが？」

シロウは何もなかつたように答えてくる

問題がない訳がない
最も大きな問題がある

「…………シロウ……！」「メン……な……れ……わ……わたし……シロウを無茶苦茶などに呼び出しかやつた……」

涙が溢れ始める

シロウにも親しい人や家族がいたはずなのに、私は無意識にシロウをここに呼び出してしまった

元の世界に戻してあげる方法なんて私は知らない。あの時は願うしかなかつたのだから
でも、異世界から呼び出したなんて聞いたことがない

シロウの向こうの世界での人生を無茶苦茶にしてしまった

そんなことを無意識に起こしたことに絶望を感じた

私が人生を無茶苦茶にしてしまった人に私は今まで何も知ることなく守られ続けていた

私は最低だ

怨まれてもおかしくない人に何も知らず、善意で助けてもらわれ続けた

私はシロウの主以前に主としてではなく、人として接せられることも願つてはいけないようは状況だったのに！－－！

しかし、返ってきたのは私が思いもしなかつた予想外の言葉

「気にすることはないさ」

え！？

「シロウ！貴方の人生を私は無茶苦茶にしちゃつたんだよ！私を恨むのは当然でしょ！…わ…私…なんか…シロウの主に相応しくない！…人として接してもらえる立場なんかじゃない！…！」

シロウに相応しい主であろうとした私が既にシロウの人生を無茶苦茶にしたそんな私が一緒に居ていい訳がない

「アスナ…君は勘違いをしている。私は君に救われたのだから」

「…え？」

意味がわからない

シロウが言っている意味がわからない
理解出来ない

「私は捕われた身だつたのだよ。確かに元の世界に知り合いはいたし、親しい人物もいた
だが、会うことは敵わなかつた。だが、君は異世界ではあるが召喚という形で私を救い出してくれたのだ。感謝こそすれ恨むなど筋違いにもほどがある」

「……でもつ……私がこんなことしなかつたら、こんな無茶なことに巻き込まなかつた!! シロウは私を主つていうけど、私にシロウの主である資格はないよ……」

「いや、君は私の主に相応しい。私が決めたのだ。それで良いのだよ」

「そんなの私が納得しない!! そんなの……

……

……

……

!?

… ハガア … … !

私はあることに気づいた

私がシロウの主でなくなる方法を

「!?! 急に叫ぶな!! 耳がいかれるだらうが!! 少しは音量を考えろ!! …」

「…「メン-ハガア！ 仮契約か、契約の魔法かけられる?」

「…仮契約か契約だと? かけれないことはないが?」

「なら、私とシロウを契約させへ……シロウが主、私を従者として……！」

「「なー?」」

「アスナ……君は何を考えている……私は君の主になるつもりはない」

「でも、これじゃ私が納得しないの……今私とシロウを繋いでる契約は多分シロウの世界の魔術のものなのかも知れないけど、私はシロウの主であるなんて納得しない……！」

シロウと戻るとしても、従者……もしくは私はシロウと対等でいたいの……！」

声を大にして叫ぶ

これだけは譲れない

これ以上私が私でいられなくなつたために……

「……つまりは、その契約を行い、お互いま、お互い従者という訳かね?……しかしだり「諦める、シロウ」……」

「アスナめ、どんなに言おうが……これ以上妥協はせんと見た。まあ、その志の高さにさうに共感が持てたがな。シロウは知らんかもしけんが、この世界の契約、もしくは仮契約には従者に対して一つアーティファクトを与えることが出来る。これから修業をするアスナにとって手札は多いほうが多いと思つが?」

「……仕方ないか。わかつた」
シロウはこんなことをしてしまった私にそれでも人として接している

エヴァが魔法陣を描き始めている

結ぶのは仮契約ではなく契約

この二人は私の意見を尊重してくれる

私を人として一個人として対等に扱ってくれる
私の能力を知りながら、普通に接してくれる

ならば……

お互いの指を軽く切る

二人が優しさをくれるならば……

私も何か返せるよつてなうづ

全幅の信頼をもって

s i d e o u t

姫と英雄は対等になつた

主と従者という形ではなくく

少人数にしてかなりの戦力を有した新勢力が出来た

これが関東と関西のバランスを傾けるのか

それはまだ誰にもわからない

to be Continued....

第7話 交渉締結・主と従者（後書き）

どうだったでしょ？

自然とシリアス回？になってしまったような感じが否めませんw

結局第3勢力になりました^ ^

いやあ、なんか書いて思つたのですが、どうも作者はギャグ等を書くのが非常に苦手のようです（^ ^ ;

この物語を考える最中に参考にした小説が3件あるのですが、やはりその3件にはまだまだ追いつくのは先になりそうですw
いつか追いつけるように頑張りたいです（^o^）~

とりあえず改めて思つたのですが、どうも原作好きの方には余り反響がよくない作品になりそうですねw今後の構想上でも拙い作品ですし、若干作者の自己満足が入ってるような気がしますが、これからもよろしくお願いしますー！

それでは次回

第8話 独立：投影魔術と闇の魔法

次回もお楽しみにー！

出来るだけ早い投稿頑張りますー！

第8話 独立・投影魔術と闇の魔法（前書き）

読者の皆様方、大変お待たせしました！！

いやあ、丁度7話を更新した翌日に祖母が危篤で、仕事休んで、葬儀やらなんやら

それ終わったら唐突にスランプとモチベ減少

忙しい仕事の間にスランプながらも、ちょこちょこ書いて今に至る
ような状況です

更新が遅くなつて申し訳ないです

出来れば今後週一で更新していくとは思いますが！！

第8話 独立・投影魔術と闇の魔法

s.i.d.e ハミヤ

光が収束し始め、そして消えた

無事この世界の『契約』が行われたのだろう
今まで行っていた契約のような魔力パスは繋がっていないが、身体
に何かしらの違和感を感じる。まあ気にならない程度なので、気に
しなければ問題なかろう

この世界の『契約』、『仮契約』には、血の交換かキス（つまり接
吻）があるらしいが、キスのほうは却下させてもらつた
まだ幼いアスナの初めてのキスを奪うのは、気が進まなかつたからだ
まあ、この世界のキスはまだ楽なほうで助かつた
私たちの世界で魔力パスを繋ぐには性行為が必要なため、それに比
べれば大したことはない

そんなことを考えている間にエヴァによる説明は終わった

この世界では『（仮）契約カード』により、従者の呪喚等が出来る
らしい

「シロウ、これが貴様の親カードだ」

カードを受け取り、そのカードに密かに解析の魔術をかけるが、神

秘の異なる世界だからだろう

魔力を感じることは出来るが、術式が違うため、内容を読み取ることが出来ない

カードの表面には長刀を持つ幼いアスナの姿が描かれている

「来たれ」

エヴァからカードを受けとったアスナが呪文を唱えた

その後、カードは光り、カードが消え、代わりにアスナの手に持たれていたのはカードの表紙に描かれていた長刀

「アスナ、その剣を少し貸してくれるか?」

「?…うん」

疑問に思いながらも剣を貸してくれるアスナ

借りた剣に解析をかける私

エミヤシロウの属性は『剣』

先程のカードに比べて属性効果があるのだろう

微かに能力をリード出来た

名　『ハマノツルギ』

能力　魔法無力化

その一つしかリード出来なかつた

本来ならば、剣の名、能力、理念、骨子、材質、技術、経験、年月等、投影に関わるあらゆる情報をリード出来るが、やはり術式が違うのが原因と見るのが打倒だろう

剣の長さに比べ、重さはさほどない

幼いアスナが奮うには若干重いかもしけないが、数年すれば可能だ

すまないと言い、ハマノツルギをアスナに返す

アスナも大方見終わったのだろう

「去れ」と言い、剣がカードに戻った

「さて、大まかな契約の件は終わつたが、次にシロウ、貴様が異世界から来た魔術師と言つていたが、お前はどんな魔術が使えるのだ？」

「私は魔術師としては二流でね。たいした魔術は使えないのだよ」「御託はいい。お前が使える魔術はあるのか、と聞いているんだ」

「ふむ…私が使える魔術はある魔術から流れ出たものなのだが、解析、強化、後は投影ぐらいなものだ」

「その魔術はどのようなものなのだ？」

「大まかに説明するならば、解析はあるものの情報を解析するものだと思って構わん。契約カードは術式が理解できなかつたせいだろうが、解析は不可能だつたが、アスナの剣のほうは少し解析が出来たがね」

「ほう…ではどのような情報が読み取れた?」

「剣の名は『ハマノツルギ』、能力としては『魔力無力化能力』と

いつたところだ。

：本来私が行う解析は剣の名、能力、理念、骨子、材質、技術、経験、年月等の様々な情報を読み取れるが、その『ハマノツルギ』の剣にしても別世界の術式のために全て読み込むことは不可能だったよ

「

「戦闘には向かんが、ある程度応用が利きそなものだな。次は？」

「次は強化だ。まずは例を見せようか。…ここに一枚の紙がある。これに強化をかける。そしてこうすると、こうなる」

上に振り上げた強化した紙を机に振り下ろす

パツリイイイイイイン！！

ビクッ

アスナが震え、そして二人が驚く

「大まかに言えば、解析で見たものに、魔力を流し込み、物の状態を強化する魔術だ。

これは武器に魔力を通し強度を高めたり、身体に強化を加え、力や移動速度をあげたりと、まあそのようなものだな」

「……次」

「残るは、投影。単純に言えば複製だ。

私が持っているこの湯呑みを……このように複製する魔術といったところだ。まあ、真作には劣るがね」

と右手に持っていた湯呑みを左手に投影して見せる

「……以上か？」

「まわな」

- うおー! ?

扉の向こうから声がした
「どうやら起きあつたらしい
わ、めんどくなつた…」

貴様、何をほうけている！――！

魔術というから面白いしたものだと思ったら、それだけだと、ふざけるのも大概にしろ！！！」

一 ちよ二と席を外すそ

「お、何が呑んでいるか無視し
隙の部屋へ

意識を刈つて戻つてくる

「シロウ！！お前は自分が魔術師として一流と言つたな？そんな半端な魔術だけなら、三流…いや、四流以下だぞ！！！」

「……エヴァ、難しい条件だが、広く人目に付かない場所を知らなかね？」

「シロウ、貴様何を言いはじm 「その場所で説明しよう」……わかつた。しっかりと説明してもらひうだ？」

「ああ」

エヴァは自身の影から小さな球体を出し、机の上に置いた影にものを入れるか……たいした魔法だ

私にもそんな魔術が使えればと思うが、考えたところで意味がない

「この球体から少し離れていろ」

アスナと共に離れる

そうするとエヴァがその球体に魔力を込め始め、球体が光り始める

「近づけ」

端的な説明

言われた通り、近づく

……と

浮遊感に包まれ……

視界が開けた
と思えば……

日光が照り付け、風があり、海のようなものが見え……

まさにそこはリゾート観光地だった

「何を考えているかは知らんが、ここはあの球体の中だ」

声のほうを向けば腕を組んでいるエヴァ

「つまりはあれかね？私たちは圧縮されたあの球体の中に転移したと？」

「理解が早いな。その通りだ」

いやはや、もうこの世界の魔法には驚く」とはないと思っていたが、まさかこれまでとは…

しかし…

「元の場所に戻ることは出来るのかね？あの男が起きるまでは戻りたいのだが？」

「そのことが。ここの一日前は外の一時間に当たり、ここの一日前、つまり外の一時間経たねば出られん。まさか、一時間程度で起きるようなことはしてないだろ？」

「当然だ。昨日の今日で関東魔法教会も攻めてはこまい」

それにもこの世界の魔法は凄い。こんなものが私たちの世界にあつたら、歳はとるが人生変わるだろ？」

「ならば、説明に入らう。まずはこれを見てほしい」と、干将莫耶を投影する

「そのアーティファクトがどうかしたのか？」

「まあ、まずは聞きたまえ。これをここに置く」

と干将莫耶を自身の田の前の地面上に置き、立ち上がる
「さて、ここからが問題だ。この剣はここにある。……………なら
ば、これは何だ？」
と地面に置いてある干将莫耶を破棄することなく、新たに干将莫耶
を投影する

「えー?」「……」

……

「……シロウ」

と、この空間に久しく声が聞こえた
声の主は、アスナだ

「この剣やさつき闘う時に使つてた武器つて全部シロウが投影で作
つたものなの？」

「正解だ、アスナは意外と発想力も高いのだな」

「……意外は余計」

と顔を若干膨らませ、いじけているお姫様がいる

「もう怒るな。補足をするならば、私の世界では一般的に投影とは、
儀式道具が足りない時の代用品として扱う。

普通の投影は、時間が経てば自然消滅してしまいますが、私の投影は特
殊でね。私が投影したものは私がその投影物を破棄しない限り、半
永久的に残り続ける。

さらに、私の属性は『剣』なので、特に武器である剣や槍、鎌などの
武器に能力がある場合、解析でその武器を読み取り、その武器の
ランクは多少下がるが、その武器を能力を含めた、ほぼ真作に近い
形で投影を行うことが出来る。

属性ではないものを投影するならば、余計に魔力を消費するがね」とハマノツルギを投影してみせる

「この剣は術式が違うので、能力などの全てを読み取ることは出来
なかつた。

単純にある程度の切れ味のある剣だよ」

「……シロウ……貴様、自分がどれだけ異常なのか理解しているのか？」

「それは当然だ。私のこの異常性に気づいた人間に追われたからな」「投影ということは、想像して作った訳ではないのだろう。あれ程のアーティファクト、どこで見た？」

「信じられないかも知れんが、ある闘いに巻き込まれた時に、数人の英靈にあつた時に見たよ」

「はー? そんな馬鹿なことがあるか! !」

「……英靈?」

「アスナはわからんか。英靈とは、この旧世界の昔の様々な大戦時に名を挙げ、人々に信仰のように崇めたてられた英雄のことだ」

「その昔の英雄に会つたの?」

「そうだ。その時に多くの宝具を持つた英靈がいた時に読み取つたものが多い。

宝具というものは、その英雄の象徴たる武器のことと言つ

と……

この空間に大量の魔力が膨れ上がつた

強大の魔力により、空間が震える様な感覚がある

その発生源は…

「気に入つた!!!!!! シロウ！お前は最強の魔法使い、闇の福音の仲間に相応しい！！！」

闇の福音 ハヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ

「それは良かった。

……私にはまだ切り札が残っているが、これは見せるだけに使うには余りに魔力がもったいない。まあ、いつか見せる時を期待して待ちたまえ」

「ほう、……そこまでのものならば仕方あるまい。その魔術の名だけでも聞かせろ」

「その魔術の名は『固有結界』。まあ内容は想像に任せる」

「シロウ、アスナ、お前らは私の期待以上の反応を見せた…！
ならば、私も私独自の究極の魔法を見せよう…！！！」

「リク・ラク ラ・ラック ライラック

来たれ（アギテー・）氷精ウェーラント・スペーゲチャヤース・オブスクーランテース 閻の精ウエーラント・スペーゲチャヤース・オブスクーランテース！！

闇を従え（クム・オブスクラティオニー） 吹雪け（フレット・テンペスター）
ト・テンペスター（^{「ワーリス}_{「ワイス・テンペスター・オブスクランス}） 常夜の氷雪
闇の吹雪！！！」

「術式固定！！！」

「^{スタグネット}掌握！！！」

「^{スプレーメントウム・プロ}魔力充？」

「アルマティオーネム
術式兵装」

と体に蒼黒く光が纏い、冷気が流れ始めた

「ほう」「……」

「攻撃型の魔法を取り込むのか」

「そうだ。魔法を圧縮し、纏め、自身へ取り込む『闇の魔法』とい
うものだ。

この魔法は取り込んだ魔法によつて自身への付加能力を加えること
ができる

「……私も使えるようになる?」

「これをか？お前は頭が良い。普通に魔法が扱えるならば、近い将
来覚えてもらおうとしよう。取り込んだ魔法は…」

エーミックタム
解放！！

このように放つことも出来る「る来出来」

「いやはや、無茶苦茶にもほどがあるが……
流石最強の魔法使いといったところだ。」

まあ、今日はもう休もうか。私と、アスナも疲れている。
ここから出た後、あの男の相手をしなければならないのだ。休んで
いて損はあるまい」

と、私たちは休んだ
アスナが急かすため、初步的な魔法の確認を行った
王家の魔力ということで、若干魔力が違うらしいが、普通に使えた
ということだけは記しておこう

時間は経ち……

そして、外の時間にして翌朝9時……

「……………来たか」

と、前回の倍以上、三桁いるかぐらいの魔法使いを連れて、翁、近衛近衛門は現れた

これだけの味方を連れてきたのだ

ナギ・スプリングフィールドを渡さなかつた場合の保険か、それとも渡し終わった後の攻撃のためなのか。

その中にタカミチというガキもいた。アスナを奪還することを諦めてはいないようだな

まあ、エヴァもいるのだ

”大した”量ではない

「待たせたのう」

「気にすることはない。物事は”穩便に”済ませたほうがいいから

な

と強調して話す

「もし、交換はどひするかの？」

「じじい……とりあえず俺をどひにかしりーねりゅうぢや、今度じや
じこつらぶつ飛ばして、姫子ちゃん連れ戻してやる……」
トナギ・スプリングフィールドが叫ぶ
どひやらいの男は、まだ私たちと鬪ひ坂らしき
馬鹿にもほどがある

先に言つておぐが、じの男はずつと拘束し、黙らせておいた
たかが、一日だ

食事をとらなくとも大丈夫だらへ、と思
黙らせ続けていたが

「…………あんちよじ」

と、じの場に爆弾が投下された

「なー?お前、姫子ちゃんに何しやがった!—姫子ちゃんがこんな
ことこうはずがねえ!—

どひやらいの馬鹿は私が何かし、アスナがじのよくなじとを喋つて

ことと思つてこないしー

「そこそこタカミチには、話したかもしれないけど、紅き翼には感謝はしてい。」

でも、先に手のひらを返したのは貴方たち。私は貴方たちが正義の魔法使いが嫌い。そしてシロウたちは違うから。

私は貴方たちと一緒にには行かない。

私はシロウたちを信じて生きていいくからー。」

「なー? 何でだよー! 僕達が何 w 「詳しきは、そこのタカミチという坊主に聞きたまえ、答えが返つてくるはずだ」 … おい! タカミチ! ! ! お前何 w 「少し、静かにしまじょつか。ナギ」 … アル! ! !

と、現れたのは、白いフードを着た、黒髪の男アルといったか。

ナギ・スプリングフィールドと関わりが深いといえば、紅き翼の面子と考えるのが妥当だろう。 にしてもこの馬鹿はずつと叫び続けている。 どれだけ煩いんだ

「初めてまして、アルビレオ・イマと申します」

「H//ヤシロウだ

「いやはや、ナギが負けたと聞き、ビーヴの馬の骨かと思いましたが、……………」

この男、やけに嫌な予感がするな
この男、この世界の魔法使いとしてはかなり上位だろう
相手をするのはめんどくさそうだ

「中心に金と、大まかな経歴が書いてある書類、誓約書を置きたま
え。

確認すれば、この男を引き渡そう」

「ナギ君を渡す証拠がない以上、それは出来んのう」

「生憎と私はそこまで悪ではない。基本歯向かう人間にしか手を加
えたことはないのだかね？」

それに、ここは譲歩してもらおうか。交渉が決裂して、困るのは私
たち側ではなく、そちら側なのだから

「…………わかつた」

関東魔法教会側が交渉物を置き、離れたのを見て、近づく
アスナとエヴァには離れてもらっている。

もし、向こうが動いた時に対処しやすいからだ

問題は何もないな……

後は、向こうが攻撃してきた時の対処方法を考えておくが

「問題はないな……。この書類に間違いや、または何か不利な状況を

加えた場合、この麻帆良全域をなくす覚悟を持つて相手をしよう

〔 〕

そして.....

ナギ・スプリングフィールドを相手に向かい、投げた

ଅନ୍ତରେକୁ ପାଇଁ ଏହାରେ ଆମେ ଆମେ ଆମେ ଆମେ ଆମେ ଆମେ

関東魔法教会が勢いをつけて、攻めてくる

近距離系は武器を構え、遠距離系は詠唱を始める

やはり攻めてくるか…

英雄が一人もいるのだ
普通の敵にならそれは正しい

そう……”普通”なら

「そうか…ならば」ちらもそれに答えるとしよつ。
こちらに攻めてくる余裕がなくなるようにすれば問題ないのだから
な」といい、

裏切りの短剣と黒塗りの『』を投影する

「I am the born of my sword.」

「破戒すべき全ての荷」

向かうは、麻帆良を覆つている結界

結界が破壊されると同時に現れたのは鬼や鳥人間のような異常生物

「……………」

「言つた筈だがね？」こんな結界を破壊するなど容易いと」

「…ぬぬぬ」

「丁度いい。制約を破つたのだ。

このまま」の麻帆良を、関東魔法教会を壊すのもいいかもしけんな

「こちらの話が聞こえているものは思つてはいるだらう

今現れた異常を対処するだけではない

英雄を打倒した相手もしなければならないと

「まあ、今日は見送るとして」

と、何人かは安心したような顔をしているものが出でてきた

「だが、忘れないほうがいい。

こちらは少人数だが、そちら、関東魔法教会を打倒する力があることを。

今回は忠告だ

次はないとと思え」

と、関東魔法教会が忙しい最中、私たちは交渉物を持ち、離脱した
そういうえば、あのアルビレオ・イマだつたか
あの男何もしてこなかつたが、お互い様子見といつたところだらう

s a i d o u t

世界についに大きな歪ができた

イレギュラーによる第3勢力の確定

本来、英雄の息子を守る生徒としてあるべき少女が

記憶を失つことなく、新しい意思を持つて別の勢力についた

世界の進む道は、ついに行き先を未知のベクトルへと進め始めた

どのような方向へ進むか

物語は新たな道を進む

to be continued.....

第8話 独立・投影魔術と闇の魔法（後書き）

いかがだつたでしょうか？

作者としてはもう少しうまく表現していきたいのですが、なんともいえない感じでござります

とりあえず、今後ともよろしくお願ひします

多分次回は時間が跳躍します

現状の確定を行つての時間跳躍ですね

跳躍した後、どのような道に進むか

「うー期待ください！！！」

次回

第9話 成長・第3勢力 天の杯「ヘヴンズフィール」

次回もよろしくお願ひします！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3768p/>

黄昏に生きた小さな願い

2011年3月13日21時28分発行